

「みんなの学校」上映会&シンポジウム

前にも投稿した「はるよこい」。表題のレポートなど話題満載。私の寄稿文を紹介しておきたい。記憶をしっかりと「記録」するために。

「こと」の始まりは今年7月20日のある電話からだ。12月3日に「みんなの学校」上映会をやりたいので、名古屋市立大学で会場を確保できないかと相談を受けた。大学も共催して実施することになり、退職の身ながら、実行委員となり準備を進めてきた。



会場は地下鉄桜山駅から近く、市大病院横の「さくら講堂」。じつはエレベーターやトイレなど気になる点があり、2回の「下見」を行うまでは心配だった。へんな夢まで見た。広い会場ながら傾斜が緩やかで、車いすの人にも好評のようだった。こうして12月3日を迎えた。なにより晴天の暖かい日。地下鉄駅から会場まで、市大の学生、卒業生らに「案内役」をつとめてもらった。「案内役」の学生から、関係者や参加者に励ましの声をかけてもらい感動したと、うれしいメールも。参加者はじつに227人。

1時から主催者挨拶のあと、すぐに映画「みんなの学校」を上映。1時間46分だが、あっという間に時間が過ぎた。運動会や卒業式のシーンなどで目頭があつくなることも。つどいは当初、映画上映会として企画されたが、第2部でシンポジウムも実施することに。そのコーディネーターの「大役」をつとめた。示唆に富む、一木玲子さんと杉田宏さんの報告後、会場からの質問や発言に移った。市大3年の学生を皮切りに、次から次へと手が挙がった。でも5時きっかり、つどいは終わった。「こーでねーか」という気分だ。今回のつどいで感動し、学んだことは多いが、2点だけ紹介したい。

まず第1に映画「みんなの学校」の感想と評価。大空小学校の理念「すべての子どもの学習権を保障する学校をつくる」が、映像の中で生徒と教師の関係などを通じ感動的に描かれていた。こうした実践は校長のリーダーシップだけでなく、教師同士の協働と「助け合い」、それに地域との細やかな連携によるものだ。じつに積極的な情報発信と交流がなされている。映画のなかでの「別室受験」、教育のあり方に疑問の声も。

第2に障害者をめぐる厳しい現実と「インクルーシブ教育」だ。障害者のご家族から、地域や学校との根深い「温度差」がリアルに指摘された。なかでも障害者が義務も果たさないで、権利ばかり主張して批判されるという発言に注目。こんな風潮が、世の中に蔓延しているが、生きる権利こそ問われるべきだ。大人と子ども、それぞれの問題点を重ね合わせて考えていく。「ともに学ぶ」ことの意味をしっかりと受けとめて、ふつうの当たり前なものにしていく。最初から分けないで、多様で柔軟な選択の道をつくる。

今回の企画から学んだことは多い。もっと書き続けたいが、紙数の関係もあり、別の場で書いていきたい。さいごに、名古屋市立大学の伊藤恭彦副学長・人文社会学部長が「閉会の挨拶」で述べたように、これを機会に大学と地域、とりわけ障害者、その家族と支援者らとの持続的な交流が深まることを期待したい。(2016年12月17日)